

『土御門院女房』注釈(二)

山崎 桂子

冷泉家時雨亭叢書第二十九卷『中世私家集五』に影印されている新出資料『土御門院女房』(仮題)を読み解く試みである。本文は本紀要(第二十三卷第二号、二〇〇二年一月)に翻刻しており、それに基づいて注釈を施した。内容は、土御門院に仕えたある女房が、院没後に院のことを懐古して記した日記風の作品で、和歌四十三首(長歌一首)を含む。土御門院の土佐から阿波への遷幸時期をめぐる記述など、歴史資料としても注目される。作者は家隆女である小宰相の可能性が高いが、確証は得られていない。

〔キーワード〕 土御門院女房、承明門院小宰相、家隆女

はじめに

本稿は本紀要第二十五卷第一号(二〇〇四年一月)掲載の『土御門院女房』注釈(一)に続くものである。

凡例も前稿を踏襲している。

前稿の【2】の「語釈」で「ほりかはの堂」について、中宮篤子の建立した堀川の御堂かと記したが、『中右記』『百練抄』によって、これは保安元年(一一二〇)四月十九日に全焼していることが確認されるので、当たらない。ここで訂正しておきたい。

本文についても22丁裏の一行目を「御方々の人のめとも、」と翻刻しているが、「御方々の人の御心とも、」とすべきだと気づいたので本稿では訂正して注釈を加えている。

【10】

心もあらねば、みなみおもての中門のうちをみれば、御こゆみのありしところのかはらぬをみて、

⑩も、さやもむなやなかりしあづさゆみなどひく人のなきよなるらん

⑪わすられぬおもかげばかりみにそえてみるもかなしき月のかげ哉

〔語釈〕▽みなみおもての中門のうち…「みなみおもて（南面）」は寝殿前の南庭のこと。「中門」はこの南庭を東西から相對して営む中門廊に設けられている出入り口。ここは東西どちらかの中門の内側。▽御こゆみ…小弓。遊戯用の小さい弓。ここは弓自体ではなく、小弓の催しをいう。▽も、さや…不明。▽むなや…不明。

「や」は矢であれば、弓の縁語。▽あづさゆみ…梓の木で作った弓。▽ひく…引く。弓の縁語。▽⑩…「ためしなきかかるとわかれになほとまるおもかげばかり身にそふぞうき」（建礼門院右京大夫集・二二五）「なき跡の面影をのみ身に添へてさこそは人の恋しかるらめ」（新古今集・哀傷・八三七・西行）「わすられぬそのおもかげを身にそへていつを待つまの命なるらん」（続拾遺集・恋五・前関白左大臣・一〇七〇）。

〔現代語訳〕

（身も）心も平静ではいられないので、（寝むこともできず）、南面の中門の内を見ると、そこはかつて上皇様が小弓をなさった所であったが、その時と少しも変わらない様子であるのを見て、

⑩（初・二句不明）どうして梓弓を引くべき方がここにいらつしやらないという現実なのでしょう。

⑪（忘れようと思つても）忘れることのできない上皇様の面影ばかりを我が身に添えて、一人見るのも悲しい月の光であることよ。

〔補説〕前段【9】に続く場面である。通宗が帰ったあと、有明の月あかりのもと南面の中門のあたりに目を転ずると、そこはかつて院が小弓を催し楽しんだところ、今もそのままであるのに、当の院だけがいない現実を認識している。⑪歌は右京大夫・西行両歌の影響下に詠まれている。

【11】

女院の御所の御なげき、ことほりにもすぎてみまいらするかなしざ、

⑫なみだがはそでよりをつるたきつせにうきぬばかり

とみるぞかなしき

〔語釈〕▽女院：承明門院在子（前出）。▽御なげき：

女院御所全体というより、生母である女院自身の嘆き。

▽ことほりにもすぎて：道理を越えて。なみなみではなく。はなはだしく。▽なみだがは：涙川。ここは歌枕としてではなく、激しく流れる涙を川に見立てたもの。▽たきつせ：滝つ瀬。「たぎつせ」とも。水の激

しく流れる瀬。急流。▽うきぬ：「浮く」は水中や水面を不安定に漂うこと。ここは悲嘆の余りの心理状態と院を失った抛り所無さという。⑫：「滝」「瀬」の縁語。「川」の縁語。「袖」「落つ」「浮き」は「涙」の縁語。

〔現代語訳〕

女院御所の御嘆きは、なみなみではなく見申し上げる、その悲しさ（と言つたらない）。

⑫女院様の涙が川となって袖から落ちる、その急流に浮き漂うばかりのご様子を見るにつけても悲しいことだ。

〔補説〕作者は承明門院御所である土御門殿に住んでいるのだが、本作品の記述から判明する土御門殿内の居住の様子は以下の通りである（詳細は別稿を用意）。寝殿（母屋）には女院がおり、配流前の土御門院は東西いずれかの対屋（東の対屋ではないかと思われる）に寄寓し、そこが仙洞御所となっていたのであろう。作者は院の配流前も後もその対屋にいる。

【12】

たちよるかたもなき心ちのみして、いかにすべきぞや、とぞなげかるゝ。

⑬かすならでほどなきみとぞおもひしにいまは心のをきどころなき

〔語釈〕▽たちよるかたもなき心ち…身を寄せて頼ろうにも頼るべきところもない心地。【11】を受けて、

「たちよるかた」は具体的には女院御所を指すか。▽かすならでほどなきみ…（院の寵愛という点では）とるに足りない我が身。ここは「院の寵愛をそれほど多く受ける身とは思っていなかったのに」との謙辞であろう。

〔現代語訳〕

私も（上皇様を失った今）、身を寄せて頼ろうにも頼るべきところもない不安な心地だけがして、「さてどうしたものだろうか」と嘆かれる。

⑬上皇様の御寵愛はとるに足りない我が身の程と思つていたのに、今となっては（身の置き所はもとよ

り）心の置き所もないほどの悲しさだ。

【13】

しりたる人のもとより、なげきもいかばかりか、と、ひつかはしたるも、もよをさるゝ心地して、

⑭かなしさのそのあか月のま、ならばけふまで人にとはれましやは

〔語釈〕▽しりたる人…作者の知人。どういう人物か不明だが、作者を見舞っているので親しい知人であろう。▽そのあか月…【2】【3】【4】に描かれていた院との最後の別れの場面を指す。このことは次の【14】にも述べられている。▽⑭…「かなしさのその夕暮のままならばありへて人にとはれましやは」（二度本金葉集・雑下・六二四・橘元任）。

〔現代語訳〕

知人のもとから、「お嘆きもどんなにか（深いことでしょう）」ととぶらつて来たのも、改めて悲しみの催される心地がして、

⑭ 悲しさが、お別れしたあの暁の時のままだったならば、今日まで生き永らえてあなたのお見舞いを受けるようなことがあったでしょうか（生きてないといわれなかつたはずです）。

〔補説〕⑭ 歌は院と別れた時の悲しみがどんなに深かったかを逆説的な表現で答えたもの。歌のパターンとしては珍しいものではないが、やはり橘元任（能因息）歌をそのまま取ったもので、作者の詠作の特徴の一つとすべきであろう。『金葉集』の詞書によれば元任歌は弔問歌への返しを代作したものの。

〔14〕
京をた、せをはしますあか月をおもひいづれば、いまぞかぎりと覚えしに、なにとなくあけくれてながらへたるも、我ながらつれなく覚えて、

⑮ いまはとておもひをくりしあけほの、心のいかでなをのこりけん

〔語釈〕▽いまぞかぎり…今が命の限りだ。「かぎり」

は臨終・最期の意。悲しみの余り絶命するばかりであることをいう。▽つれなく覚えて…無情に思われて。心と身体が連動していないことをいう。▽いまはとて…今は限りとて。(1)今となつてはもうこれつきりだ、と院との別れをいう。(2)地の文の「いまぞかぎり」と同じく、(悲しみのため生きてはいられないだろうから)もはやこれ限りだ、と自分の命について言う。(1)(2)いずれとも解し得るが、(1)で訳した。▽あけほの…地の文の「あか月(暁)」と「あけほの(曙)」とはさす時刻が異なる。作者が厳密に区別して使っているかどうかは不明だが、〔3〕によれば、作者には後朝の別れをした暁、出立を見送った曙、という具体的な時間認識があると思われる。

〔現代語訳〕

都をお発ちになつたあの暁のことを思い出すと、「もう生きてはいられない」と思われたのに、(こうして)なんということもなく明け暮れて命永らえているのも、我ながら無情に思われて、

⑮今となつてはもうこれつきりだと思つてお送りした、あの曙の折の（絶命するばかりの）心がどういふわけでお生きた永らえて残つたのだろう。

【15】

をかしき事もあれば、おのづからうちわらひなどするも、こはなにごとぞや、とおどろかれて、

⑯ありふればなくさむとしもなければなみだのひまのあるぞかなしき

〔語釈〕▽ありふれば…在り経れば。生き永らえて月日を送れば。▽なみだのひま…涙の絶え間。泣かない時。通例は【16】のように涙の隙がないことを詠む。

〔現代語訳〕

おもしろいことでもあると自然に笑つたりなどするの
も、これはどうした事だろう、と自分でも驚かれて、
⑰月日を過ごせば悲しさが慰むというわけでもない
のに、（気づいてみれば）涙のこぼれない時もあるのは（どうしたことかと、また）悲しいことだ。

〔補説〕笑う日などあろうとも思われなかつたのに、気がつくとき笑っている自分に驚いている。【14】【15】と悲しみの内にもいつしか月日が経過していくことを記す。

【16】

日ぐらしよもすがら、なみだのみひまなきに、

⑱わがそでをなに、たとへむあま人もかづかぬひまはぬれずとぞぞきく

〔語釈〕▽あま人…海人・蟹。▽⑱…「あざりする海未通女らが袖通り濡れにし衣干せど乾かず」（万葉集・一一九〇）のように海人の衣は常に濡れていると言うが、それでも「潜かぬ隙」は濡れていないという論理で、我が袖の涙の隙なさを歌う。

〔現代語訳〕

終日終夜、涙だけが絶え間なくこぼれるので、
⑲私の袖をいったい何にたとえたらよいだろう。いつも濡れているという海人の袖でさえ、海に潜ら

ない時には濡れていないと聞いているのに。

【17】

くまなき月をみれば、おなじみそらぞかしとをもふにも、
かきくらす心ちして、

⑱ おもひやる心やゆきてもろともにたびのそらなる月
をみるらん

〔語釈〕▽くまなき月：曇りが無い月。【9】に「あり

あけの月のくまなきを」とある。▽みそら：空。「み
そらゆく月のひかりにただひとめあひみし人の夢にし
みゆる」（万葉集・七二二）。▽かきくらす心ち：悲し
みにくれて惑う心地。▽⑱：「夜な夜なは目のみさめ
つつおもひやる心やゆきておどろかすらん」（後拾遺
集・恋四・七八五・道命法師）「都にてながめし月の
もろともに旅の空にもいでにけるかな」（詞花集・雑
下・三八七・道命法師）の二首から措辞・発想の双方
で影響を受けたか。

〔現代語訳〕

美しい月を見ると、上皇様が見ていらっしやるのも同
じこの空なのだと思うにつけても、悲しみにくれ、惑
う心地がして、

⑱ 上皇様のことを思い遣る私の心は配所へ飛んで行っ
て、御一緒に旅の空にかかっている月を見ている
のだろうか。

【18】

ふしたるところのもるを、それはみるかと人とへば、

⑲ このごろのとはなみだにならばれてあめのもるに
もかへさざりけり

〔語釈〕▽みる：海松・水松。▽⑲：床を返すことは
「おもふ人雨と降り来るものならばわがもるとこはか
へさざらまし」（大和物語・一一七）で知られる発想。
「ひとりねのとはなみだにあらはれてうちはらはね
どちりもつもらず」（覚綱集・九〇）

〔現代語訳〕

臥している所に雨漏りがするのを、「それは海松です

か」と人が問うので、

⑬最近の私の床は涙に慣れっこになっているので、

今更雨が漏って濡れるからと言って裏返ししたりし

ないのですよ。

（と答えた。）

〔補説〕作者の床の辺りに雨漏りがして寝具などが濡れたのを、人が「それは海松が生えているのか」と戯れて訊ねたという状況である。この「人」も不詳だが、気の置けない友人と見られる。貴族の邸宅で雨漏りが見えることは『大斎院前御集』一五八の詞書などにも見える。ここは【16】の「あま人」からの連想もあるか。

【19】

御方々の人の御心ども、おとるもあらし、とおもふもいとかなし。

⑭たづねばやたれもなげきをこりつめてむねにたく火

のほのをくらべを

〔語釈〕▽御方々の人：【9】に「女院の御方」とある。

ここは母女院を始めとする土御門院と関わりのあった

人々。具体的には寵愛を受けるなどの関係にあった女

性達をさすと思われる。▽御心ども：「ども」は複数

を示す接尾語。ここは待遇表現としていささか不審。

或いは本文・翻字に問題があるか。▽おとるもあらし：身分は劣るとも、嘆きの深さは他の女性達に劣るまい。

▽なげき：嘆き。「なげき」の「き」は「木」との掛

詞。▽こりつめて：樵り集めて。▽ほのをくらべ：

「炎くらべ」は珍しい表現。通例は「煙くらべ」。▽⑭：

「わぎもこにあはぬなげきをこりつめていくすみさま

にやかばつきなむ」（賞綱集・五九）「人しれぬあはれ

なげきをこりつめてつひにおもひのもえやはてなん」

（苔の衣・二七）。木・樵る、焚く・火・炎はそれぞれ

縁語。

〔現代語訳〕

院ゆかりの方々の人の御心も、「身は劣るとも嘆きの深さでは劣るまい」と互いに思うのも、思えばたいそう悲しい。

⑳ たずねて見てみたいものだ。誰も彼も嘆きの木を
樵り集めて胸に焚いているという火の炎の大きさ

比べを。

しむとて命ひとつをさだめかねぬる」(風雅集・恋四・
一二七七・徽安門院)。

〔現代語訳〕

〔補説〕この段は本文に不審を残すが、㉔歌の真意は
「私の嘆きの炎が最も大きい」と言いたいところにあ
るのだろうか。

人が亡くなった嘆きを聞くにつけても、(残された人
は)どのようにしてこれから生き永らえて過ごすのだ
ろうと思うと、

【20】

人のうせたるなげきをきくにも、いかにしてながらへて
すぐずぞと思に、

⑳ ずいぶん人の思いとは相違する命だよ。厭っても
生き永らえ、一方では惜しんでも無くなるとは。

【21】

㉑ あさましくおもふにたがふいのちかないとふもなが
しおしめどもなし

〔語釈〕▽人の…人は不詳。一般的な人の意。▽おもふ

御所にてはあたりになぐさむかたもなく、はたもみまい
らするやうなれば、とのゐどころにいでたれば、いとゞ
なぐさむかたもなくて、

にたがふ…「我が身だに思ふにたがふものなればこと

⑳ やどかへておもふもかなしいかにせんみをもはなれ

わりなりや人のつらさは」(清輔朝臣家歌合・五〇・

ぬきみがおもかけ

師光)「思はじと思ふにたがふ涙かな恋は心のほかに

〔語釈〕▽御所…承明門院御所。▽はたもみまいらする…

やあるらむ」(今撰集・一三〇・顕昭)。▽いとふもな

「はた」は周囲の人。「参らす」は謙讓の補助動詞で、

がしおしめどもなし…「うきにいとふ又おなじ世をを

自分に敬意を表すことになり、不審。女院のことを言

うかとも思われるが、御所から出たのは作者。▽との
るところ：宿直所。承明門院御所からこの宿直所に
出たのか、不明。▽^②下句：「忘ればやうきにくた
び思へどもなほおもかけの身をもはなれぬ」（言はで
忍ぶ・二一五）「年ふれど有りしながらのおもかげや
身をもはなれぬかたみなるらん」（人家集・四九六・
平親清女）。

〔現代語訳〕

御所では付近に慰む所もないだろうと周囲の者も見申
し上げるようなので、宿直所に出たところ、ますます
慰む所も無くて、

②宿を変えて思うのもやはり上皇様のことで、悲し
いことだ。どうしたらいいのだろう、我が身を片
時も離れぬ上皇様の面影を。

【22】

かずならぬみにてかたじけなく、御いのりになふべし、
とはなけれども、みか月を、がみまいらするには、いま

ひとたびもみまいらせばや、と申さ「る、」こそ。

③三日のよはかげだにみ「むと」いのれどもむなしく
てのみありあけの月

〔語釈〕▽かずならぬみ：【12】にも「かずならでほど

なきみ」とあつた。作者の謙辞。▽御いのり：院の帰
京を願う祈り。三日月に祈つたものか。女院の主権で
行われたのであろう。▽みか月を、がみ：③歌にも

「三日のよ」とあり、【24】で年が改まって貞応元年

（一一三二）正月になるので、ここは承久三年十一月
か十二月の三日と思われる。「はつ雪のふりすさみた
る雲間よりをがむかひある三日月のかげ」（夫木抄・

冬・七一八九・慈鎮）。▽いまひとたびもみまいらせ
ばや：③歌と共に「ふりさけて三日月見れば一目見し
人の眉引き思ほゆるかも」（万葉集・九九九・家持）

「月立ちてただ三日月のまよねかき日長く恋ひし君に
逢へるかも」（同・九九八・坂上郎女）を踏まえた発
想。▽申さ「る、」こそ：「いみじけれ」などが省略
されている。▽ありあけの月：三日なのに有明月が出

るのは不審。掛詞で「むなしくてのみあり」を言うた
めかと思われるが、歌意が通らない。試みに通釈した。

〔現代語訳〕

とるにたらない身で恐れ多く、お祈り（の趣旨）に叶
うだろうとは思わないものの、私も三日月を拝み申し
上げるからには、もう一度上皇様のお顔を拝見したい
ものだ、と口からこぼれたのは悲しいことだ。

⑳ 三日の夜はせめて光だけでも見ようと祈るけれど

も（恋しい人に逢えると歌われた三日月に上皇様
の面影だけでもと祈るけれども）、いつもむなし
いまま夜があけてしまいう月よ。

〔23〕

こしかたゆくすゑをなにとなくあんじつッけて、ぬとも
なくてあかすひかずのみつもれば、

㉑ まどろめばゆめにも君をみるものをねられぬばかり

うきものはなし

〔語釈〕▽㉑…「寝られねば夢にも見えず春の夜をあか

しかねつる身こそつらけれ」（村上天皇御集・九）「あ
ふことをわびて夢路をたのめどもうたたねにだにいこ
そ寝られね」（経衡集・二〇八）。

〔現代語訳〕

来し方行く末を何となく案じ続けて、ぐっすり寝ると
いうこともなくて明かす日数だけが積もったので、

㉑ まどろめば夢にでも上皇様を見ることができると
に。寝られぬことほどつらいことはない。

〔24〕

なげく／＼正月にもなりぬ。

㉒ さりともとまつ事もなきとしだにもかならずかへる
春にやはあらぬ

〔語釈〕▽正月…貞応元年（一一二二）正月。▽さりともと…「さりともとなげきなげきてすぐしつる年もこ

よひに暮れはてにけり」（千載集・冬・四七〇・公光。
公光歌の第二句は本段の地の文「なげく／＼」にも

通じる。▽まつ事もなき…「ひこぼしのゆきあひのそ

らをながめてもまつこともなきわれぞかなしき」（建
礼門院右京大夫集・二八二）。▽かならずかへる：
「きてはまたかならずかへるならひぞとしりても暮る
る秋ぞかなしき」（中院集・五四）。

〔現代語訳〕

こうして嘆く嘆くも年が改まって正月になった。

②⑤そうは言っても、何ら待つこともない年でさえも、
必ずまた返ってくる春でないということがあろう
か、やはり春はやってくるのだなあ。

〔補説〕②⑤歌は、嘆く嘆く暮らして来て、春を待つ気持
にもなれなかったのに、季節は巡り、確かに春が訪れ
た感慨を詠んだものだが、曲折していて滑らかではな
い。ここから貞応元年の内容になる。

【25】

春にもなりぬれば、中門のさくらうつくしくさきたるを
みれば、

②⑥きみまさぬやどにはなにとさくらばなかなへらぬはる

はえだにこもらで

②⑦おのがさくはるをもしらば心してことしは花のには
はざりせば

花こそ物は、とうらやましくも覚ゆ。

〔語釈〕▽中門…【9】【10】既出。南面の中門か。▽

きみまさぬ…「きみまさで荒れたる宿のいたまより月
のもるにも袖はぬれけり」（古今六帖・二四八四・業
平）「きみまさぬ春の宮には桜花涙の雨にぬれつつぞ
ふる」（貫之集・七八二）。▽えだにこもらで…「吹く
風や春たちきぬとつげつらん枝にこまれる花咲きにけ
り」（後撰集・春・一二・よみ人しらず）「花はなほ枝
にこもりて鶯のこづたふ声ぞ色はありける」（三百六
十番歌合・四二・守覚）。春が枝に籠もつていれば咲
かないのだが、咲いていることを言う。▽心してこと
しは…「心して今年は匂へ女郎花咲かぬ花ぞと人は見
るとも」（栄華物語・五）。▽にははざりせば…反実仮
想。「よからまし」が省略されている。▽花こそ物は…
「去年見しに色もかはらず咲きにけり花こそ物はおも

はざりけれ」(金葉集二度本・雑・五二四・秦兼方)を引き歌とする表現。

〔現代語訳〕

春になったので、中門のところの桜が美しく咲いているのを見ると、

②6 上皇様のいらっしやらない宿には何だからと言って桜花が美しく咲いているのでしよう。上皇様が帰っておいでにならない悲しい春は枝に籠もって姿を見せないということもなく。

②7 自分の咲く春という季節をも知っているのならば、心して、今年花がこんなに美しく咲き誇らなかつたならばよかつたのに。

古歌にあるように「花というものは悲しみなどというものを思わないのだなあ」と桜がうらやましくも思われる。

【26】

みやづかはへもひさしくなりぬれば、内裏へまいれかし、

といざなふ人のあるにも、まづなみだのみところせくて、
②8 さらに又おほうちやまの月もみじなみだのひまのあらばこそあらめ

〔語釈〕▽みやづかはへ…宮仕へ。承明門院御所への現在の出仕と、それ以前の土御門院への出仕をも含めて言っている。▽内裏…この時の天皇は後堀河天皇。▽いざなふ人…不詳。内裏に出仕している人物であろう。▽おほうちやまの月…大内山は内裏のこと。「人しれぬ大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな」(千載集・雑上・九七八・頼政)。▽月もみじ・涙…「更級やをば捨山に月は見じ思ひやるだに涙おちけり」(正治初度百首・一八五一・静空)

〔現代語訳〕

女院御所への宮仕えも長くなったので、「内裏へ出仕なさいよ」と誘う人があるのにも、まっさきに涙ばかりが溢れて、

②8 更にまた、この上内裏に出仕して、その月を見たりはすまいと思えます。上皇様を慕って流す涙

のひまがあるのならともかく、ないのですから
（月も見えませんし）。

〔補説〕この段は本作品の作者の推定に関わる点で注目される。すなわち、作者に内裏への再出仕を促したとみれば、作者は内裏への出仕経験がある人物となるし、内裏への新たな出仕を促したとみれば、内裏への出仕は未経験の人物となる。再出仕であれば、「再び、内裏へまいれかし」などと言っているもよさそうであるし、更に歌に「さらに又おほうちやまの月も」とあることから、後者と解すべきであろう。「『土御門院女房』注釈（一）」の注（3）論文参照。